

「税金」という形に変えて

加古川市立加古川中学校 3年 北尾 大珠

クローゼットの中には、端から端まで、教科書がびっしり並んでいる。一番端の教科書は、「こくご一」である。兄弟の分もすべてそろっている。そして、教科書と一緒に、母がファイルに入れて、大切に保管しているものがある。それは、小学校の入学の日に給与された教科書が入っていた紙袋である。これは、「教科書給与用紙袋」というらしい。

はじめてもらう教科書に、わくわくしたあの日、「この教科書はね、みんながお金を出し合って、一人一人が同じようにもらえるの。みんなのおかげなんだよ。みんなの中には、あなたも入っているのよ。あなたのおかげで、誰かがこうやって、教科書をもらえてるの。嬉しいね。」と、母が僕に教えてくれたことを今でも覚えている。小学一年生の僕は、税金の存在を知らない。このときはただ、誰かにもらった、誰かにあげたことが嬉しかった。

高学年になる春休み、いつものように、一年間お世話になった教科書をクローゼットの中にしまっていたら、母が、一冊の教科書の裏表紙と、あの紙袋の裏面に記載されている言葉を僕に見せて、それを読んでくれた。そこには、「税金によって無償で支給」「国が無償で配布」と書いてあった。母は、「無償」という言葉を指差して、この言葉の意味を聞いてきた。僕は、辞書で調べて、「ただのこと。」と答えると、母は、「『無料』は、『ただのもの』で、『無償』は、『心のこもったプレゼント』みたいな感じかな。」と言った。

それを聞いた僕は、税金はお金ではなく、国民の気持ちなのだと思った。そして、毎年、教科書がもらえることが当たり前なのに、感謝することが大切だと気づいた。そういう気持ちが僕を大きく成長させると、思えるようになった。それ以来、四月に新しい教科書が配布されたら、まず、教科書の裏表紙の無償給与制度の意義を読んで、感謝しながら、名前を丁寧に書いている。

そして、クローゼットの中の謎が解けた。母が教科書を大事に保管しているのは、ここにある教科書の数だけ、たくさんの人の貴重な税金が使われ、支えられていることを、いつまでも心に留めておいてほしいからだろう。

あと数年後、納税者になる僕は、平等に教育を受けられる幸せを、「税金」という形に変えて、子どもたちに届けたい。一人でも多くの子どもたちに、生活を支えてくれている税金に、人に、ありがたい感謝の気持ちを育んでほしい。そして、僕を支えてくれたすべての人に、今度は自分が恩返しする番だ。

小学生の頃から身長が伸び、体も大きくなった。でも、背負う教科書の重さの感覚はずっと変わらない。たくさんの人の期待や希望がぎっしり詰まった幸せな重みを感じながら、僕が歩んできた九年間。もう少しで、義務教育が終了する。幸せな重みを感じられるのもあとわずかだ。今日も、教科書一冊一冊、かばんに詰め込みながら思う。「ありがとう。」